令和４年度　第２回草津市青少年問題協議会　会議録

■日時：令和５年２月１０日（金）１４時００分～１６時００分

■場所：市役所８階大会議室

■出席委員：１２名
髙田聡副会長、岸本修一委員、奥井さよ子委員、政川純子委員、奥長敏夫委員
山中多恵子委員、福井昌子委員、矢野廣意委員、清水順二委員、木村正雄委員
千代誠一委員、藤田朝絵委員

■出席幹事：９名
草津警察署山口生活安全課長（代理伊藤少年補導職員）
上原学校教育担当副部長（代理宇野学校教育課長補佐）、岩城危機管理課長、岸本健康福祉政策課長、堀井人とくらしのサポートセンター所長（代理田中参事）、古川生活支援課長、中瀬子ども・若者政策課長、杉山少年センター所長、柴原児童生徒支援課長（代理北村課長補佐）

■事務局：８名
子ども未来部：金森部長、黒川副部長
子ども家庭・若者課：松林課長、岸課長補佐、柴野係長、大隅専門員、新庄主査、太田青少年育成推進員

■傍聴者：なし

■講師：１名
Will be smile　～不登校から多様な学びを考える親の会＠大津　　世話人　大町千恵さん

１．開会

【副会長あいさつ】
みなさんこんにちは。
委員の皆様方、お忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございます。また、草津市内の青少年の健全育成について、日頃からご尽力をいただき誠にありがとうございます。
本日の協議会では、草津警察署より草津警察署管内の非行少年の状況についてご報告をいただき、理解を深めたいと思います。その後、「Will be smile　～ 不登校から多様な学びを考える親の会＠大津」の世話人　大町千恵（おおまちちえ）　様　のお話をお聞きしたいと思います。学校においても不登校は増加の一途を辿っており、別室指導などの対策を講じていますが減少傾向には至っておりません。本日は、大町様のお話を参考にして、「私たちは地域においてどのようなことができるのか」、「それぞれの活動をどのようにつなげていけばよいのか」を探りながら協議会を進めていきたいと思います。

２．報告・協議

議題「草津市の青少年問題の現状と今後の取組について」

（１） 事務局より

委員の変更について

草津市民生委員・児童委員協議会の委員一斉改選に伴い、本協議会の委員が中村敏治様から奥長敏夫様に変更となりました。奥長様、どうぞよろしくお願いします。

子ども・若者支援総合相談窓口、子ども・若者支援協議会について

近年の不登校、ひきこもり、若年無業者、ヤングケアラーなど、子ども・若者の問題が深刻化・複雑化していることを受け、おおむね３９歳までの子ども・若者の育成支援を推進するため、様々な困難を有する子ども・若者とその家族の相談窓口を１０月３日にオープンしました。

場所は、さわやか保健センター２階の子ども家庭・若者課内です。時間は、８時３０分から１７時１５分です。相談員は保健師１名、社会福祉士２名、臨床心理士１名の計４名です。臨床心理士によるカウンセリングは週１回程度の予約制としています。窓口での面談の他に、相談の機会を確保するために、電話相談、メール相談、Zoom を利用したオンライン相談ができます。悩みの内容によって、本人の意向を聞いたうえで、支援機関等を紹介したり、カウンセリングの利用を案内したりしています。

窓口を開設して４か月が経過し、相談内容としては、不登校や学校生活での悩みが一番多く、次いで、家族関係で悩みを感じている方や就職、ひきこもり、健康に関する悩みなどの相談が多いです。小中学生の年代は不登校相談が多く、２０歳代を超えると就職やひきこもりに関する悩みが多くなります。

次に、ヤングケアラーですが、「本来大人が担うとされている家事や家族の世話などを日常的に担っている子ども」のことをいい、一般的に１８歳未満を言います。しかし、１８歳を超えてからも家事や家族の世話を担い続ける場合があるため、草津市では２０歳代の若者も含めて「子ども・若者ケアラー」と呼び、支援しています。

次に、１０月に設置しました「子ども・若者支援協議会」については、子ども・若者育成支援推進法に基づき、関係機関が行う支援を適切に組み合わせることにより、効果的かつ円滑な実施を図るために情報交換や支援内容の協議を行うものとなっております。

１０月に開催した会議では、それぞれの立場から子ども・若者に関わる取組の話があり、関係機関の連携の必要性を強く感じられた意見交換となりました。

（２）草津警察署より

【草津警察署】

草津警察署管内における少年非行の状況

令和４年中の滋賀県内の少年非行の状況ですが、非行少年と不良行為少年を合わせて、２，６０２人を検挙・補導しており、令和３年中と比べて２７２人の増加となっています。

草津警察署管内では、非行少年と不良行為少年を合わせて３６８人を検挙・補導しており、令和３年中と比較して６人増加しています。中でも、刑法犯少年につきましては、合計４４人を検挙・補導しており、令和３年中と比較して１８人減少していますが、内訳を見ますと、暴行・傷

害などの粗暴犯が１６人、万引き・窃盗などで１９人の少年を検挙・補導しています。

さらに特別法犯少年については、一昨年に比べて６人増加しており、法令別に見ると軽犯罪法違反が６人、迷惑防止条例違反が３人、大麻取締法違反が２人、児童買春・児童ポルノ法違反が１人となっています。不良行為少年については、３１２人の少年を補導し、この内喫煙や深夜徘徊での補導は約半数を占めています。主な蝟集場所は、駅前の大型量販店や公園などで、もともと知った仲で集まっている場合もありますが、ＳＮＳで少年同士がつながり広域化していますし、さらには、見ず知らずの者とＳＮＳ上で知り合って被害にあうケースも増えています。

誘拐や児童ポルノ事件の被害にあうのは女の子と思われがちですが、男の子が被害にあっている現状もあります。さらに、全国的にも大麻の乱用事件が増えている背景には、ＳＮＳ上での大麻や薬物に関する間違った情報や、売買などの情報も上げられており、報道等でも話題になっているとおり、ＳＮＳ上で闇バイトと称してアルバイトを募集して、強盗や特殊詐欺などに加担するケースが後を絶たないなど、インターネット上には有害な情報が蔓延している現状があります。もちろん警察といたしましても、違法有害情報の浄化に努めておりますが、少年自身や少年などにスマホなどの通信機器を与える保護者の側にも、危機意識が低く、「まさかうちの子がこんな被害にあうなんて」と、おっしゃるケースが非常に多いです。インターネットの使用に関する危険性については、広く情報発信していかなければならないと痛感しています。また、インターネット上の危険以外にも、少年には家庭環境や少年自身の特性など、それぞれに課題があります。

非行を未然に防ぐ活動はもとより、非行を犯した少年らが再非行に走らないための活動についても、草津市立少年センター（あすくる草津）の方や、関係団体・関係機関の方々との連携を図りながら、少年の健全育成に努めてまいります。

（３）講演会

【副会長】

それでは、ただ今から講演に移らせていただきます。

本日は講師としまして、「Will be smile　～ 不登校から多様な学びを考える親の会＠大津」の世話人　大町（おおまち）　千恵（ちえ）　様　にお越しいただいております。

「不登校から子どもを家庭で育てるという選択について考える」と題して、ご講演をいただきます。

【講師】

私は、大津市で不登校親子のサークル活動や親の会活動をしています。今日は、我が家の子育ての経験や様々な交流で知り合った不登校家庭の親子さんの事例をご紹介しながら、「不登校から子どもを家庭で育てるという選択」について皆さんにお伝えしたいと思います。

このテーマにした理由は、不登校を経験した子どもの中には、家庭を中心に学び育っている子、しっかりと自立している子もいるということをお伝えしたかったからです。ホームエデュケーションとかホームスクーリングと言われています。

今から、みなさんに見ていただきたいものがあります。不登校家庭の親子さんの写真をスライドショーに編集したものです。登場する子どもたちは、フリースクール等に所属していません。どうしてホームエデュケーションなのかをお伝えしたくてスライドを用意しました。数年前に、教育機会確保法（不登校支援を後押しする法律）ができました。不登校の子どもたちの育ちや学

びに関心を持っていただけるようになって、とてもうれしく思います。・・とは言うものの、「支援のための支援」が先行することで、かえって子どもを苦しめるという事例がこれまでにありました。過去の事例から、これからの不登校支援で何が大事なのかなと考えていく材料として、紹介いたします。

【スライドショー字幕より要約】

１９９０年代、不登校対応の見直しにより、民間フリースクールの利用が学校の出席日数にカウントされるようになりました。そのことで助かる子がいる一方で、子どもの意見や状況と関係なくフリースクールに無理やり連れていかれる子も増えました。それは、「フリースクールにさえ通えない自分はダメなんだ」という更なる自己否定を生み出すことになりました。あるフリースクールでは、子どもが家庭で育つことを肯定的に見てほしいとホームエデュケーションという教育のあり方を知らせる活動を始めました。そうして、ホームシューレが誕生しました。

ホームシューレというのは、ホームエデュケーション家庭を支援したり、会員同士をつなげたりする組織になります。家庭同士の交流を会員が主体的に作っています。私が出会ってきたお子さんは、家庭の外で様々な傷つき体験を重ねて不登校になっていることが多いです。最初は外に出ることに憶病になっていることも多いですが、私たちはそのことを否定的に捉えずに、まずは家庭の中で子どもが安心して育てる基盤を作っていきます。不安感が強い子にとっては、たとえフリースクールでも、居場所と言われているコミュニティーでも、子どもが単独で参加することは、ハードルが高いことが多いです。そのため、私たちは充分に培った「子どもからの信頼」を担保に、親子で交流機会を作っていきます。子どもは「誰かと遊びたい」気持ちが出てきた時に、親同士が安心して交流できるコミュニティーに、一緒に参加していきます。たいていの子は、最初は親の近くから離れません。親の側で、周りの様子を観察しています。ここは大丈夫だなと思えてくると、自然と親の近くを離れて、子ども同士の交流が生まれていきます。

我が家の息子も、ネットワークの中で友だちができてから、元気になっていきました。このネットワークで出会った４人のお友だちもそれぞれ進学、就労をして、今は元気に過ごしています。

今日は、段階に沿って、「我が家がどのようにして、何を大事にして子育てしてきたか」、をご紹介したいと思います。不登校の子を家庭で育てることを、ここでは、ホームエデュケーションという言葉を使ってお話を進めていきたいと思います。ホームエデュケーションの実践例は多様であり、あくまでも事例の一つとしてお聞きください。

不登校段階表をご覧ください。

この段階表は、「不登校でも子は育つ」という本を参考にしています。京都で長年活動されている♪あんだんて♪という不登校の親の会のお母さん方が書かれた本です。段階表は私の方で、ホームエデュケーション実践者の視点を加えて、一覧表にまとめなおしたものです。

我が家のホームエデュケーションの最初のステップは、子どもの感覚（ものさし）、自分軸を取り戻すことから始めました。具体的には、子どもの感覚を信じ、優先させることから始めました。子どもが不登校になって、外に出にくくなることがよくあります。子どもが外に出ないのは、もしかしたら、「外に出たらろくなことがない」という体験を重ねてしまったからなのかもしれません。なので、この時期の外出は家に帰ってきた時に、子どもが「今日は楽しかった」とか、「また行きたいなあ」と思えることを優先しました。息子は、自分なりに小さいチャレンジを繰

り返していきました。ちょっとやってみて、ここまでできるわ、と安心して、不安を安心に変えていってるようでした。下向きだった目線が、少しずつ上がってきて、「今日の空はきれいなあ」とか、「月がきれいなあ」とか、言葉が出るようになりました。このころに、段階表で言う安定期に入ったのかなあと思います。

子どもが不登校になった時、多くの保護者さんは、自分の子育てが悪かったのかって悩んでいます。私も、自分の子育てが間違っていたんじゃないか、間違っていたとしたらどこで間違えたんだろう、と悩みました。でも途中から、悩むのはやめました。代わりに、子どもがこのまま学校に行かないとして、「自分は、子どもをどう育てていこう」とか、「あれっ、子どもが生まれた時、自分はこの子にどう育ってほしいと思ってたんだっけ」とか、そんなことを考えるようになりました。

私が思う幸せと子どもが思う幸せは、違うかもしれない。もし、私が思う幸せと子どもが思う幸せが違っていたら、子どもが自分で、自分が幸せと思っている方を選んで生きていくのが一番幸せなんやろなあ。そう考えていくと、子どもには「自分の人生」をたっぷりと味わってほしいと思いました。私が今できることは何やろう。この子のお母さんという立ち位置でできることは何やろう。我が家のホームエデュケーションは、いつもその問いから考えることにしています。ホームエデュケーションと言うと、「家の中で、お母さんが勉強を教えるんですか？」と聞かれることが多いです。我が家では、むしろ学習の手前のサポートの方に力を置いていました。うちの子の場合は、「自分を信じる」ことと、「目の前の誰かを信じられること」、その二つの力を育てることにこだわりました。自己肯定感とか他者信頼感とか言うのかもしれません。安定期に入ったころ、ホームエデュケーションのネットワークの中で、同じゲームが好きな同年代のお友だちができました。気が付いたら、毎日遊ぶようになっていました。おしゃべりがしたくて、ゲームをするようになっていきました。どうして不登校になったのか、お互いに話をしていたこともあったようです。居場所って、具体的な「場所」と違って、相手との「関係性」が大事なのかなと、子どもを通して教えてもらいました。友だちができてからの子どもは、どんどんと成長していきました。オンラインで友だちができたことで、今度は地元の友だちがほしいと言い出しました。そこで、夫と一緒にサークル活動を立ち上げました。学校外で学び育つ子どもたちと、その保護者のための交流サークル、「びわ湖フリーわいわい」、略して「びわフリ」と言うサークルです。主に体育館や公民館などの部屋を借りて、親も子も自由に過ごせる場として開放しています。体育館で体を使って遊ぶ我が子を見て、「うちの子、運動が嫌いなんだと思ってました」と驚かれる保護者さんもいます。びわフリの活動日に、他団体の子どもや若者が遊びに来てくれることもあります。体育館を使って活動しているところは少なくて、びわフリの場が、良い機会となっているようです。びわフリとは別に、保護者さんを対象とした親の会活動もしています。

親の会につながってくださる保護者さんのお話を聞いていると、身近に気軽に相談できる人がいないことが多いように感じています。頼る人が少ない中で、孤軍奮闘して子育てをしている方が多いです。子どもが不登校になると、学校というコミュニティから外れ、途端に地域のネットワークから孤立してしまいます。そのため親の会では、保護者さん同士がつながれるような工夫をしています。ＢＢＱやゴミ拾い、ウォーキングなどの企画やヨガ企画などです。交流を通して、保護者さん自身が落ち着きを取り戻して元気になっていきます。気持ちに余裕が出てくると、保護者さんもお子さんの不登校を受け入れやすくなってきます。話を戻しますと、うちの子は、まずは人間関係作りから始めました。そのおかげで、少しずつ人間不信が収まっていきました。困

った時には誰かに相談するとか、時に愚痴を聞いてもらって気持ちを発散するとか、グループで決めごとをする時には話し合って合意を形成していくとか、大事なことをお友だちとの交流で学んでいきました。自分と他者との違いを知ることで、自分について深く考えるきっかけにもなったようです。そうやって時間をかけて、自分を信じる、目の前の誰かを信じられるという感覚を得ていきました。いよいよ中学生に上がるお正月くらいから、子どもの言葉に変化が出てきました。「頭使うことしたい」ということを言うようになりました。間もなく「勉強したい」「勉強して、大学に行きたい」「大学で、人の役に立つ研究をしたい」と言い出しました。そして、教科学習に取り組むようになりました。何で大学に行きたいのか理由を尋ねてみたら、ユーチューブの動画がきっかけになったようです。すごい研究をしている大学の動画を見て、そこの大学に行きたいと思ったのがきっかけだそうです。中２の秋、担任の先生が子どものがんばっている様子を見て、不登校の子がＩＣＴ等を使って学習をした時の出席認定について、校長先生に掛け合ってくれました。あまり知られていないですが、文部科学省通達で、不登校の子が自宅でオンライン教材を使って学習をした場合は、校長先生の裁量で出席と認めることができるということになっています。その規定で、校長先生もオンラインで学習した日を出席にしてくださいました。子どもは、学校の先生に認められたことがうれしかったみたいです。秋からは、定期テストのときだけ学校に行くようになりました。対面授業を受けたいと言って、学習支援をしているフリースクールとか塾に通うようになりました。ついに中学３年生の６月、学校の定期テストから帰ってきた時、「俺、学校に行くことにするわ」って、急に宣言が飛び出しました。聞くと、試験の後でこっそりと自分のクラスを偵察しに行ったようです。クラスメイトの様子を見て、このクラスならやっていけそうと思って、その場ですぐに担任の先生に登校したいという意思を伝えて帰ってきました。担任の先生もすぐに動いてくださって、翌週から別室に登校することになりました。別室には毎日、誰かしら先生が訪ねてくださって、皆さんが代わる代わる子どもに話しかけて、関係性を作ってくださいました。子どもも、いろんな先生と触れ合うことで安心感を育み、秋からはクラスに入っていく決心をしました。５年半のホームエデュケーション生活で、自分軸がしっかりと育った息子は、クラスの中でも物おじせずに過ごしていたようです。ありがたいことに、卒業までの半年間でしたが、その間にお友だちになった子もいて、今も時々誘い合って遊びに行ってます。息子は、今でも時々言います。「自分は不登校になったけど、不登校になってからの人間関係には、本当に恵まれた。感謝しかない」「俺が一番ラッキーなのは、親に恵まれたことやなあ、ありがとう」というふうに言ってくれます。高校２年生ですので、まだまだこの先何があるか分かりませんが、息子は、この先も何があっても乗り越えていけるという確信が持てているみたいです。我が家の息子は、５年半を家庭を中心に育ってきました。便宜上、ホームエデュケーションという教育方法でお伝えしましたが、大事なのは、教育の方法ではないと私は思っています。学校を中心に考えるんじゃなく、子どもを中心に、子どもを主体として考えていくこと、その視点の違いが一番大事だったんだと思っています。「ホームエデュケーションで子どもを育てよう」って決心したことで、子どもを主体に子育てをすることができた。その意識の切り替えが、我が家にとって、一番大事だったんだなあと思っています。

次は、自分の経験とこれまで見てきた事例から、こうなっていったらいいなっていう願いをお伝えしたいと思います。子どもが不登校になった時、小さい時から診てくれていたかかりつけ医の先生から、この子にはインターナショナルスクールみたいな、子どもの主体性を尊重してくれる学校を探してあげた方がいいよってアドバイスを受けました。そこで初めて、教育を選ぶとい

う発想を知りました。子どもの教育環境を自分で考えて、自分で選んでいくという意識の変化は、もしかしたら学校に行くことが当たり前と思いすぎて、自分でも気づかないうちに学校に依存的になっていたんじゃないか、という気づきにつながりました。もっと子どもを主体として考えていたら、子どもに合った学校の使い方、距離感の取り方ができていたのかもしれない。そう考えていくと、子どもの不登校は学校の制度が悪いとか、家庭の教育力の問題とか、そういうところから離れて考えることができるんじゃないかなと、今は思っています。

話が逸れますが、草津市のフリースクール助成の利用について、利用しづらいというお話が伝わってきています。週に１回以上、月４回以上の利用がないと助成が受けられないという規定のために、せっかく受給資格があっても、助成が受けられないというケースがあるそうです。助成を受けられないと家庭への負担が大きくなります。場合によっては、フリースクールの利用をあきらめざるを得ないことにもなります。たとえ回数が少なくても、その時に感じた、「楽しかった」「心地よかった」「もっとしたい」という気持ちが、その後のその子の成長を後押ししてくれると思います。学校にしてもフリースクールにしても、そこに行く回数に価値を置きすぎることで、その子の貴重な心動く体験の機会を奪うことのないように願っています。草津市のフリースクール助成の制度は、せっかくの先進的な取組ですので、利用しやすい制度になるといいなって思ってます。

話を戻します。不登校は、いつ誰がなってもおかしくありません。なので、毎日の育児を頑張る子育て世帯のすべての保護者さんが、子どもが不登校になっても、どんな状況でも、たとえ一人親家庭であっても、子育てをあきらめなくていいように、社会全体で子どもを育てやすい仕組みになればいいなって思ってます。不登校支援という狭い枠組みじゃなく、子育て支援として子育て世帯を応援してもらえたらいいのになって思っています。それが私の願いです。

国内には、ホームエデュケーションを支えるネットワーク団体がいくつかあります。ホームシューレの他に、多様な学びプロジェクトとか日本ホームスクール支援協会などがあります。多様な学びプロジェクトでは「街のとまり木」と言う、平日昼間に子どもが気軽に行ける場所を検索できるサイトを運営するなどの取組をされています。草津市の「やんちゃ寺」も登録されています。登録団体は、フリースクール等の他、カフェやプレイパーク、児童館、お寺など多岐にわたります。

最後に、昨年５月に発足した、滋賀県フリースクール等連絡協議会について御案内したいと思います。この協議会は、滋賀県内の不登校家庭を支援する、民間支援団体のネットワークになります。現在の登録会員さんは、約４０となっています。この協議会は、２年前に『学校に行きづらい子どもたちのための育ちと学びのサポートブック（大津市版）』の情報誌を発行したことから始まりました。この情報誌には、大津市内の民間の不登校支援団体の活動内容が掲載されている他、不登校に役立つ知識、行政の相談窓口などが掲載されています。大津市版を発刊後、各地域の保護者さんから同じような情報誌がほしいとお問い合わせをいただきました。そこで、大津市版作成のノウハウを提供して、各地域のサポートブックが出来ていきました。協議会には、主にサポートブックつくりを通してつながった団体様に加入していただいております。サポートブックは、今では大津市版に加えて、長浜・湖北エリア版、甲賀市・湖南市エリア版、東近江圏域版が発刊済となっています。あと残るのが、草津市、守山市、栗東市、野洲市の４市エリアと高島市になっています。うちの子が不登校になった８年前は、滋賀県にフリースクールや親の会などを見つけることが難しかったんですけれど、今ではたくさんの応援団がいることが、とても心

強いです。

我が家では、ホームエデュケーションで子どもを育ててきましたが、決して家庭だけで抱えていたわけではありません。たくさんの方とのご縁とつながりのご協力があって、複数の相談できる相手に支えられてきました。ご近所の皆さんが、子どもが学校に行かなくなってからも、変わらずあたたかく接してくださったこともありがたかったです。これからは、支援する、支援されるという関係じゃなく、当事者の子どもを主体に、その子の周りの大人たちがみんなで子どもを育てていくようになればいいなって思っています。是非不登校の子を見かけたら、不登校の子ではなくって地域の中の大事な子どもの一人として、温かく見守っていただければうれしいです。これで、私からのお話は、終わりにしたいと思います。最後まで、ご清聴いただきましてありがとうございました。

【質疑応答】

【Ａ委員】

フリースクールの名前はよく聞きますが、中身についてはあまり分かってなくて、このチラシを見ると、大津市には１０以上のフリースクールがあって、草津市には３つだけ・・。

市の方にお聞きしたいのですが、助成金やフリースクールの数について、なぜ大津市と草津市は違うのか。また、草津市の助成が進んでいるのはどうしてか。

【講師】

草津市は、全国的にも早い段階で助成を始められましたので、全国の人から注目されています。草津市のフリースクール助成について、関心を持つ他県の方から、助成制度が始まった経緯などをよく聞かれるのですが、私もよく分からないです。

【Ａ幹事】

本市は、人口が増加している全国的にも稀な市であり、新しく転入してきた方が、横の関係が少ないために、状況がよくつかめなくて不登校になるケースがあります。不登校児童生徒の数は、全国平均を上回っている状況にあり、多様な学びの選択肢があることが重要であると思っています。草津市には、適応指導教室もありますし、各学校は別室対応を行っています。市内の小中学校は、何らかのシステムを備えています。不登校児童生徒の、一つの選択肢としてのフリースクールに少しでも通いやすくするために、令和３年９月に助成金制度をスタートさせました。全国的にもかなり早い取組であり、多くの市町からも質問が入っております。また、遠くから視察に来られる支援団体の方もいらっしゃいます。現在も、週に数本の問い合わせが入っております。課題が山積している状況ですが、先程仰っていただきましたように、月１回、週４回に制限させていただいているのは、一定のラインを引きながら検証を行い、見直しを進めながら、より良い制度に変えていければと思っているからです。

【講師】

ありがとうございます。私も聞きたかったことなので、勉強になりました。波及効果という意味では、草津市さんが先陣を切ってくださったので、そこから彦根市とか甲賀市など、県内でもいくつかの市町でフリースクール助成が始まったので、すごくありがたいと思います。

【Ｂ委員】

高等学校は義務教育ではないので、どうしても出席がある程度必要となります。やっぱり出席日数が不足すると、単位認定ができない、進級できない、卒業できないということになっていき

ます。不登校から復帰して、進級、卒業に向かう生徒は少ない状況です。高校生になってからは、時間との勝負になるので、長い目で見ていると進級できなくなり、次どうしますかとなるのですが、そのあたりの登校刺激の仕方や学校の関わりをどうすればよいのかと考えています。高校生として受け入れた以上、進級、卒業して、社会に出てくれればという思いですが、なかなか良い解決策がなく、何かアドバイスをいただけたらありがたいです。

【講師】

ありがとうございます。

不登校は、一人ひとり理由が違うので、こうしてくださいとは言いにくいと思います。まずは、お子さんの状況を確認してあげてほしいです。その上で不登校段階表でいう急性期や行きしぶり期には、何をどうしても学校には行けないと思いますので、この時期は、休むということが大事になってくると思います。高校生だとその後の進路のことが気になって、なかなか休みにくいでしょうから、本人さんもすごく不安だと思うので、休んでもその先大丈夫やでという情報を伝えてあげることが必要だと思います。具体的には、通信制高校が増えてきていて、それまでの単位を引き継いで通信制高校に移ることができるので、このような制度を利用することも一つだと思います。元気になれば何でもできますし、高校卒業等認定試験もあり、それに合格すれば大学にも専門学校にも行けるので、思っているほど進路が閉ざされているわけではないと思います。親も子も情報が不足しているので、しんどい思いをされていると思われます。「大丈夫やで」という情報を伝えていただければと思います。

【Ｂ委員】

学校の関わりとして、声かけをどのようすればよいのかアドバイスがほしい。

【講師】

行けなくなっている理由にもよると思います。本当は行きたいんだけど行けない子と、本当に行きたくないんだという子に対して、言葉かけの仕方も変わってくるでしょうし、何が正解ということは言えないのですが、子が本当に一番しんどい時というのは、こちらからは言えることが少ないんですね。まずは、本人の気持ちが落ち着くためのお手伝いをすることくらいしかできなくて、気持ちが落ち着いてくると考えられるんですね。一番しんどい時に必要なのは、「自分は誰からも見棄てられていない」と思えるかどうかだと思います。

【Ｂ委員】

寄り添えば良いのか、少し距離を置く方が良いのかケースバイケースであり、親御さんと連携を持ちながら、直接本人とは話ができなくても、学校は心配しているんだよという思いを伝え、安心感を持ってもらえたらと思っています。

【講師】

これからは、保護者の方も勉強をしていかなければならないと思います。学校だけに頼るのではなく、子どもが不登校になった時、お互いに何ができるのかを知る努力は必要だと思います。

悩んでいるのは本人であり、大人が「解決してあげる」ことはできないですが、「悩んでいる気持ちを分かってもらえた」「一緒に考えてくれた」という経験が、その子の力になると思います。

【Ｃ委員】

私の経験や聞いたことを感想として話します。４５年くらい前の社会は、「学校に行って当たり前」「勉強は誰のためにしているのか」など、教育現場、家庭、社会は、凝り固まった考え方

であったと思います。集団登校だったので、朝に行ってきなさいと家を出されて、行きたくないので涙ながらに玄関の柱にしがみついていると、親は子どもを無理やり学校へ連れて行って、学校の玄関先に放置するようなそんな時代でした。しかし、当時の養護教諭は子どもに寄り添い、保護者を叱り飛ばし、その子の担任も叱り飛ばしてくれました。「子どもの目線にあなたたちは立っていない」と・・。その養護教諭のおかげで、不登校であった子が、学校に行けるようになりました。私の経験を振り返りお話ししていますが、もしこの時期に、今のような活動があれば、その子どもはもっと違う育ち方をしたのでは、と深く考えさせられます。

青少年育成活動を１０年携わってきましたが、「子どもの目線に立つ」、この考えは大人にも当てはまるのではないかと考えます。「当てられたから、無理やり来ました」「参加が億劫になり引っ込んでしまう」・・このような方々にどのように対処していくのか。社会全体で取り組んで行けたらと思います。

【取組報告・意見交流】

【Ｄ委員】

ＢＢＳでは、寺子屋教室で小中学生を対象に活動を行っています。様々な理由により、学校に行きにくい子どもが増えてきていると感じます。寺子屋活動では、子どもたちと大学生とが一緒なって動き回っています。寺子屋が子どもたちの居場所になっているのだと思います。子どもの目線に立つことの大切さを実感するとともに、心配している親の気持ちがなかなか子どもに伝わらないことのジレンマも感じています。親子関係がうまくいかない。また、学校と保護者がうまくいっていないケースもあり、そのような時こそ、私たちボランティアが子どもの目線で活動していくことが大事であると思います。

【Ｅ委員】

民生委員児童委員協議会では、小中学校との懇談会を行っています。不登校生はいますかと尋ねるのですが、小学校でも中学校でも必ずいます。皆さんのお近くにも不登校の子どもさんがいるのがよく分かります。ＢＢＳさんとかジャガーの部屋さんとか、不登校の子どもを見てくれる場所があるので、そのような場所を上手に活用して、民生委員として温かいまなざしで子どもたちを見守るようにしています。

【Ｆ委員】

草津市更生保護女性会ですが、社会を明るくする運動の一環として、一般公開ケース研究会を１２地域で開催し、地域の方々と一緒に不登校やヤングケアラー等についての話し合いを行っております。現在は、ミニ集会を各地域で行っており、子ども・若者総合相談窓口のパンフレットを利用しております。「この頃、本当は学校に行く時間帯なのに、地域の自動販売機でジュースを買っている子どもがいるんだけれど」といった、小さな情報を共有しながら子どもたちの様子を見守っています。

【Ｇ委員】

保護司会としましては、毎年小中学校の校長先生や関係の先生方と懇談を行い、学校の実情等をお聞かせいただいております。地域によっては、朝の見守り運動を実施しているところもございますし、犯罪が起こらない、明るい社会づくりのための啓発活動を行っております。

【Ｈ委員】

青少年育成市民会議では、「地域の子どもは、地域で守り育てる」「大人が変われば、子どもも

変わる」と、目標を掲げながら研修会を行っております。非行防止部会におきましては、愛の声かけパトロールを実施しており。また、青少年問題をみんなでトークとして、講師をお招きして講演会を実施しております。（例年は、講演後に懇談を実施していますが、今年度は、コロナの関係で講演会のみとしました）７月には、青少年の主張発表大会を実施し、市内７中学校と１高等学校から、各校代表者の思いを市民のみなさんに聞いてもらっています。１１月には、青少年育成大会も実施しております。それぞれの学区においての違いもあり、地域差があることを感じております。地域の子どもを育てるには、まず地域の大人が勉強し育成されなければなりません。研修会等をとおして、勉強していかなければと思います。

【Ｉ委員】

小中学校は、義務教育となっていますが、どんなにいい所であっても、どんなにいいお皿であっても、そこに入りきれない、乗り切れない人は、どんな場面でもいると思うんです。お皿に乗れなかった子どもを、その子が不幸だと捉えてしまい、どう救おうかとしているのであって、僕から言わせば、不幸なことでも何でもないと思うんです。その子の気持ちが分かってもらえないことこそが、不幸だと思うんです。その状況からこぼれていることは不幸ではなく、義務教育に行かなくても高校の資格が取れる方法とか、電子機器を使う仕事とかいろいろあると思います。目的に向かう方法は、昔は、小中学校を出て、いい高校を出て、いい大学を出て・・というようにみんなが目指していたんですけれど、今はそんな現状ではないと思います。ＰＴＡについても、存在がなくなったから、どうだと言うことではなく、それは、ＰＴＡが存続していた時代に育った僕たちから見れば違うだけであって。今の人にとったら、当然のことなんだろうと思います。

考えたいのは、子どもにプレッシャーをかけるという行為を、やっぱり大人がやってしまい、自分の考えで「これやっておきなさいよ」、「何であんたはできひんの、みんなしてんのに」と、こういうことを言ってしまうんですね。それが、いかに本人に対して悪いプレッシャーになっているかということに気が付いていないです。話が少し変わりますが、まちづくり協議会で、わんぱくプラザを行っているのですが、わんぱくプラザでは待つことを何回か繰り返し、やっと静かになりましたね、「最初の時は１５分かかったけど、今日は１０分やったね。」と、子どもに伝えることによって、みんなが一緒に早く始められるための取組を行っています。子どもを叱らずに、待つことが大切だと思います。学校では、ある程度強要されることがあると思うので、僕らは、子どもを叱りません。そのようなやり方を通しています。例えば、明日の遠足を雨天で中止する場合でも、判断は各家庭に任せています。自分で判断して、これは無理だろうなと思ったら来ない。大丈夫だと思ったら集合場所に来る。場所や機会を提供するのが一番の目的なので、判断は本人や各家庭に任せています。一軒一軒に中止連絡を入れたり、集合場所に来られても、すいませんとは一切言いません。

子どもたちは、そんなに急ぐことはないと思います。そんなに焦って、急がせないようにしてあげたいなと思います。

【Ｊ委員】

私どもの団体は、スポーツ団体の事務局を務めており、スポーツ少年団も受け持っています。スポーツ少年団では、特に気になることは聞いておりません。ただ、私の近所に不登校であった子どもがいて、今は専門学校に行っています。小さい時からよく知っている子どもさんでしたので、お母さんの相談に乗ったりもしていました。お母さん、子どもさんと一緒に、気分を和らげるように、おやつ作りをしたり、晩御飯を一緒に食べたりもしました。お母さんには、子どもの

落ち着ける場所づくりと、子どもに温かい心のこもったことばかけを行ってもらうことで、このお子さんは自分の進路を進むことができているようです。

【Ｋ委員】

私は、不登校がらみで高校を進路変更し、その後の進路については、自分で情報を探し自分で決めました。学校では、子ども主体の関わり方とか、子どもたちとの触れ合いをどのように行っているのでしょうか。地域では、深く子どもたちと関わろうとしているのに、学校は、どこまでかかわっていいのか分からないとおっしゃられていましたが、理想的なのは、学校・家庭・地域が連携をして、情報や取組を共有出来たらものすごくいいのにと思います。この場でも、個別の情報で完結するのではなく、もっと連携ができ、密になれればと思います。今日は、学びも多かったし、私自身が地域で親としてできることは何かなとゆっくり考えていきたいと思います。

３．閉会

【副会長】

開かれた学校づくりとして、今年度から草津市の方では、小中学校２０校で、スクールＥＳＤ草津推進事業に取り組んでおり、地域との連携を深めていくことに努めており、令和６年に完全実施となります。先程のお話のように各種団体との懇談会を学校は実施していますが、そこで終わるのではなくて、そこから得た情報をどう生かすのか、学校からいろいろとお願いすることもあるかもしれませんが、そこでどう連携を図っていくのか、地域に根ざした学校づくりを持続可能な形で、地域・学校・家庭の関係が活性化できればと思っています。うまく絡み合える関係ができればと思います。

本日は、充分な討議の時間を取ることはできませんでしたが、私としては大変貴重なお話を聞くことができたと思います。それぞれ持ち帰られて、効果的な機能ができますようよろしくお願いします。本日は、ありがとうございました。

【事務局】

本日は、お寒い中をお越しくださいましてありがとうございます。

昨年から始まりました、子ども・若者育成支援ですが、子ども・若者を取り巻く現状は、複雑化・深刻化している状況です。当事者、ご家族はもちろんですけれども、支援者が抱え込んでいる問題も深刻だと感じております。大町さんのお話の中で、たくさんの相談者を持つことが、次のステップに進むカギとなるというお話もいただきました。正にそのとおりだと思います。そして、支援者の相談先も必要かと思います。草津市子ども・若者総合相談窓口が、そのような機関になれますように更なる取組を進めたく思います。みなさま方のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

本日は、ありがとうございました。